

田辺聖子の『源氏物語』体験考

——『新源氏物語』を中心として——

呉羽 長

(一九八八年一〇月一九日受理)

A STUDY of SEIKO TANABE'S "SHIN-GENJI-MONOGATARI"

—With special Attention to the Influence of "Genji-Monogatari"—

Susumu KUREHA

一

田辺聖子の現在に至るまでの『源氏物語』とのつきあいの⁽¹⁾中で彼女がこの物語に抱いてきた思いを、自身が端的に語っている文章として「年々歳々の『源氏』」(『講座源氏物語の世界』第三集、昭五六・二、有精堂)をあげることがができる。

女というものは、なぜかくも『源氏物語』を好むのであろうか? 『源氏』を読む会、『源氏』の講義などにおける女性の集まりのよいこと、おどろくばかりである。

その理由は、私は、『源氏物語』は「愛」の専門書であり、女性は愛の専門家だからだ、と思っている。専門家が専門書を読むのになんの不思議があろうか、しかもこの専門書は初級から上級まで、さまざまなクラスを、すべてこれ一書で弁じてしまう。終生、これ一冊の専門書で足りるのである。

実際、若いころの私は『源氏物語』というのは、ところどころのシーンこそ、目に止まるものの、やたらに冗長で膨大な、ふる物語だと思っていた。原典の難解さときたら、歯が立たなくて、とてもことに原文の滋味を汲みとることなど出来なかった。

三十過ぎて口語訳で読み返し、原典の文語文法、文体のクセなどにも馴れて、呼吸づかいがややたのしめるようになってきた。それにもまして、『源氏物語』は尽きせぬ興味のある面白い、そして楽しい物語であった。ここには恋の種々相があり、愛のタイプの見本帳がすべてそろえられていた。物語は、ただごとの、よしなしごとの、くだくだしく綴るとみえながら、因は果を生み、それがまた因となって登場人物は華麗に絡み合う。私は『源氏物語』の面白さを発見した気になって、夢中だった。この年頃には私にもまだなにかしかの、人生的腕力があつたせいであろう。

四十代になった私には『源氏物語』は悲しい小説ではないかと思われ

はじめた。ほんとうに幸福な人間は、この中に幾人いようか、源氏も紫の上も、薫も匂宮も、それぞれに不幸である。あきたりぬ人生である。栄華をきわめつくした源氏でさえ、愛する人に次々と去られてしまう。薫は恋を片端から失ってしまう。失意と憂悶のうちに巻は閉じられる。

子供のころ、私が読んだのに西条八十氏の『源氏物語』の抄訳詩があった。これは母が毎月とっていた『婦人倶楽部』だか『主婦の友』だかの雑誌に、カラーページでのついていたもので、岩田専太郎氏の挿絵も美しかったが、西条八十氏の詩が流麗だった。残念なことにほとんど忘れてしまつて、ただ、二行だけ、あざやかにおぼえている。

一生者必滅、会者常離

悲しい恋の 花吹雪

というのである。八十さんは女子供の俗耳に入りやすいように、やさしい詩句で『源氏』を謳われたのであるが、しかしこの二行ほど『源氏』の真髓をいいあてているものはないのではないかと、四十代の私は、思った。『源氏物語』は、全篇これ、悲しい恋の花吹雪が散り紛うているのである。

しかし、このころ、五十代に足をふみ入れるようになって、改めて与謝野源氏、谷崎源氏、円地源氏と読み直し、原典も折々にひろい読みしつつ、私は仄々と、物語をよむ喜びを味わえるようになった。

悲しい物語であるが、それは昇華されて、生きる喜びにたかめられている。人間のおろかさ、至らなさが、そのまま、人間というもののよさになつていく。また私は、このころやっと、自然の美しさを『源氏物語』に教えられる喜びを知った。今までは、人間の運命や恋のゆくえのなまなましい葛藤ばかりに気を取られていたのに……。空の色、花の色、それらをも楽しませてくれるのが『源氏物語』なのだ。

これから先の私は、更にどんな風に『源氏』を読もうとするだろうか。作者は四十代で死んだらしいけれども、極楽から地獄まで見透したような紫式部は、きつとまだこれからもさまざまなおとろきを、私に味わわせてくれるに違いない。(三三四・三三五ページ)

田辺聖子は右の文章の冒頭一・二段落にみるように「愛」の専門書としてこの作品を捉えている。「ただひとつ、いつも、この小説を読んで感じるのは、(知るのではなく、肌で照り映える熱によって、感じられる、というほうが正しい)人間の「女々しさ」の市民権、といったようなものである。男性読者が読んで「女々しいのが耐えられない」といった、その女々しさが人と人の距離や、社会との関係を裁量する、大きな、大切な感情になっている。」(『源氏紙風船』「源氏」は面白い小説か? 一六一―一七ページ、昭五六・一〇新潮社刊の本文に拠る)というように、「愛」「恋」という点では一貫しつつ、しかし、彼女の人生への洞察力の深まりによりそれを支える物語世界の見方は変わっている。それを田辺聖子は、「若い」ころ・三十代・四十代・五十代・「これから先の私」と分け、各々の時期の特質を簡潔に説明している。

まず「若い」ころの田辺聖子にとつての『源氏物語』は「やたらに冗長で膨大な、ふる物語」であつたという。彼女は、戦中戦後にかけて樟蔭女子専門学校で国文学を学び(昭一九二二、一六一―一九歳、以下年齢の記述を省略)、「源氏・枕」は国文学の代名詞であり、彼女にとつてその講義は『源氏物語』との出会いであつたといえるが、しかしそれは老教師の退屈なもので、日々の生活とは無縁な古文解釈に終始し、その難解なことばの奥にひそむ躍動する生命には到ることがなかった。女学校在学の頃から、彼女は、中原淳一の絵の入った雑誌『少女の友』や吉屋信子・吉川英治の小説などを読み、少女的、あるいは伝奇的ロマンの世界に憧れていた。それは当時の田辺聖子が共感していた『更級日記』の作者の、『源氏物語』の世界に憧

れ、没入する姿に近いといえるが、そうした彼女の心性と交響するかたちで『源氏物語』は未だその前にはなかったといえる。彼女は前掲「源氏」は面白い小説か?」で、「若菜」下巻の源氏の朧月夜忍び歩きの段について語る際、「昔、私は『源氏物語』を谷崎潤一郎氏の口語訳で読んだのであるが、途中からどうにも興味がうすれてしまい、完読したのはただ義務感からだけであったから、このあたりは飛ばし読みだった。やっとな味読したのは田地文子氏の口語訳によってである。また、たとえ読んだとしても若年のころは、このあたりのしみじみした情趣は解しにくいところであろう。」(二四ページ)と述べているが、これはその「若い」頃の読みのありようを端的に示しているといえる。

三十代の田辺聖子は『源氏物語』に「恋の種々相」「愛のタイプの見本帳」を見、それを『源氏物語』の面白さとして捉えている。彼女は「千すじの黒髪 わが愛の与謝野晶子」(昭四七・二、文芸春秋社刊)のなかで、自己を顧みて次のように述べている。

私が若くて同人雑誌をつくったりつぶしたりしていたころ、仲間の青年の一人が、ある運動に挺身していた。私はその頃、小さいはかない恋の小説ばかり書いていた。女にはそれよりほか、書くことはないように思われた。恋の小説は、女にとっていつまでも終らない、永遠に未完の作品であったから、いくつも書けた。私は、その世界がすべてだと思っていた。

ところが、私が、それらの作品をみせてほめてほしいと思った運動家の男の子は、それを非常に下らないものである、とけなした。世の中には恋よりもっと重大な、切迫したものがあつた、それを書かなければいけない、と教誡した。それは何か、と私は勢いこんできいた。私はどうしても、彼にほめられる小説を書いて、彼の関心をひきたいものだと考え

ていた。私は彼に好意を持っていた。それは明日食べる米がない、ということだ、と彼は傲然といった。戦後すぐなら知らず、その頃はもう食糧に不自由していなかったから、私はたいそう困惑して、そういう小説を書いて彼に気に入られるすべのないことを悲しんだ。しかしいまだにもつて私は、女と男の恋が小さく、「あした食べる米がない」ほうが大きい、とは思えぬ。かの青年の気に入られる機会は永遠にないであろう。

天地のいみじき大事一人のわたくしごととかけておもはず

晶子のそんな歌を見たとき、私はうれしかった。女の恋は、女にとつて「あめつちのいみじき大事」であり、「いちにんのわたくしごと」ではないのであつた。(『田辺聖子長編全集』第十卷一八三―一八四ページ、以下『全集』と略称する。)

自作年譜(『全集』第十八巻収載)によれば「若くて同人雑誌をつくったりつぶしたりしていたころ」とは、同人雑誌『航路』『のおと』などに小説を書いていた三十代前半頃のことであろう。この時期彼女は「小さいはかない恋の小説ばかり書いていた」とあるが、更に三十代後半、「感傷旅行」(『航路』第七号、昭三八・八)、「うたかた」(『小説現代』昭三九・六)、「女の食卓」(『河北新報』昭四一・一二・一―四二・二・一五)、「猫も杓子も」(『週刊文春』昭四三・一二・九―四四・七・七)など「人生的腕力」に支えられた想像力によつて様々な恋の相を描き、そうした彼女の好尚に合うかたちで『源氏物語』には不定の形の魅力ある様々な恋がちりばめられていたといえる。

この間、昭和四十一年二月、三十八歳で川野純夫氏と結婚、始めは別居していたが、後に大家族の中で暮らすことになる。そうした生活の変化によつて「求婚旅行」(『サンケイ新聞』昭四七・七二―四九・三二)などにみられるように、若さによる恋の純一さの底部に、人生に対する洞察と余裕がみえてくる。泌み入る情緒や想像力を身内に込めて誠実に感受性をもつて生

きる「中年」を描くが、そこに見られる四十代の心境は、この時期の彼女の『源氏物語』をみる姿勢と大きく関るものであろう。前掲の「年々歳々の『源氏』」では四十代に『源氏物語』を「悲しい小説」として見るありかたを述べるが、彼女の人生への洞察と余裕が「恋」の深層にそうした様相を探りあてたのである。⁽²⁾『新源氏物語』(初出は昭四九・一一・八〜五三・一・二七、週刊朝日)はそうした田辺聖子の『源氏物語』観をふまえて、独自の内実を持っていくといえる。以下、『新源氏物語』を考察して田辺聖子のこの時期の『源氏物語』に対するありかたの特質を明らかにしていく。

二

『新源氏物語』を見てまず気付くのは、その始発が「桐壺」巻からでないことである。『源氏紙風船』「源氏という男」の章によると、源氏をさつそうとした恋の狩人として登場させたかったからという。そのために平板な叙述が続く「桐壺」巻は削除したわけであるが、それは小説的構成への変改として捉えられよう。小説としての効果的構成を確保して、因果関係の明確な緊密な筋立てをもって統一された作品をめざす姿勢がうかがえるのである。こうした構成の変改の意識は始発部が著しい。

また、田辺聖子はこの作品の執筆について「源氏物語」を近代小説として味わおうとすれば、この不壊の白珠ともいうべき原典をうんと噛みくだき、その美しき細片を、ひろく敷きつめ、ちりばめてしまふ、そういう「私訳」もあつていいのではないかと思うのだが……。「源氏紙風船」「埋める作業」の章(一七九ページ)と述べているが、ここで「不壊の白珠」を「美しき細片」に変えるということには、田辺聖子が『源氏物語』に触発され発見した価値をふまえて、『源氏物語』を自分の好みに従って大きく変改しようとしている姿を読み取ることができる。つまり「あくまで原典の意図に添い、その香気

を失なわず、物語の流れをかき乱すことのないよう、そして面白さと品位を更に増幅する」(「埋める作業」一七二ページ)という姿勢を示すものである。「うんと噛みくだく」とは、前述の冒頭部における構成の改めや、散文とは異なる凝縮した抒情をとりこめる歌をわかりやすい会話に変える点を含んで、原典の難解さを克服することの意と考えられるが、「美しき細片」を「ちりばめる」とは具体的にどのようななかたちでおこなわれるものか。彼女が『源氏紙風船』にもその箇所を掲げて右の訳出の姿勢を紹介している「賢木」巻冒頭の場面について、原典と比較しながらその実態を明らかにしていく。六条御息所という気位の高い高貴な女性が、源氏の愛を強く求めて求めきれず、その愛の決裂により野の宮の秋の自然の美しいたたずまいの中で彼と別れる件りである。

まず『源氏物語』の本文を掲げる。⁽³⁾

齋宮の御下り、近うなり行(く)ま、に、御息所、もの心ばそく思はす。やむごとなく、煩はしき物におぼえ給へりし、大殿のきみも、失せ給ひて後、「さりとも」と、世(の)人も聞えあつかひ、宮の内にも、心ときめきせしを、その、ちしも、かき絶え、(a)あさましき御もてなしを、見給ふに、「まことに憂し」と、おぼす事こそありけめ」と、しりはて給ひぬれば、よろづのあはれを、思しすて、ひたみちに、いで立ち給ふ。

(b)親、添ひて下り給ふ例も、殊になけれど、いと、見放ちがたき御有様なるに事つけて、「うき世をゆき離れなん」と、思すに、大将の君、さすがに、「今は」と、かけ離れ給ひなん」も口惜しく思されて、御消息ばかりは、あはれなるさまにて、たび／＼通ふ。対面し給はん事をば、「今更にあるまじき事」と、女君も思す。(c)人は、「心づきなし」と、思ひ置き給ふ事もあらむに、我は、いますこし、思ひ乱る、ことのまさるべきを、「あいなし」と、心強く思すなるべし。

(d)もとの殿には、あからさまに、わたり給ふをりくあれど、いたう忍び給へば、大将殿、え知り給はず。たはやすく、御心にまかせて、まうで給ふべき御すみかに、はた、あらねば、おぼつかなくて、月日も隔たりぬるに、院の上、おどろくしき御悩みにはあらで、例ならず、時く悩ませ給へば、いとく、御心の暇なけれど、「つらき物に、思ひはて給ひなんも、いとほしく、人ぎ、情なくや」と、おぼし起して、野の宮にまうで給ふ。九月七日ばかりなれば、「むげに、今日・明日」と、思すに、女がたも、心あわたしけれど、「立ちながら」と、たびく御消息有(り)ければ、「いでや」とは、思しわづらひながら、いと、あまりむもれいたきを、「物ごしばかりの対面は」と、人知れず、まち聞え給ひけり。はるけき野辺を、分け入り給ふより、いと、物あはれなり。秋の花、みな衰へつ、浅茅が原も、かれくなる虫の音に、松風すこく吹(き)あはせて、そのこと、も、聞きわかれぬ程に、物の音ども、たえく聞えたる、いと艶なり。睦ましき御前、(e)十余人ばかり、御隨身、ことくしき姿ならで、いたう忍び給へれど、殊に、ひきつくろひ給へる御装、いと、めでたく見え給へば、(f)御供なるすきものども、所がらさへ、身にしみて思へり。御心にも、「などて、いままで立ち馴らさつらむ」と、過ぎぬるかた、悔しうおぼさる。物はかなげなる小柴を大垣にて、板屋ども、あたりく、(g)いと、かりそめなり。黒木の鳥居どもは、さすがに、神くしう見渡されて、わづらはしき気色なるに、神官の者ども、こ、かしこに、うちしはぶきて、おのがどち、物うち言ひたるけはひなども、外には、さま変りて見ゆ。火焼屋かすかに光りて、人げなく、しめくとして、こ、に、物思はしき人の、月日隔て給へらん程を、おぼしやるに、いと、いみじうあはれに、心苦し。北の対の、さるべき所に、たちかくれ給ひて、御消息聞え給ふに、遊びは、みなやめて、心に

きけはひ、あまた聞ゆ。何くれの、人づての御消息ばかりにて、身づからは、対面し給ふべきさまにもあらねば、「いと、ものし」と、思して、「かやうのありきも、今は、つきなきほどに、なりにて侍るを、おもほし知らば、かう、しめのほかには、もてなし給はで。いふせう侍る事をも、明らめ侍りにしがな」

と、まめやかに聞え給へば、人々、「げに、いと、かたはら痛う。立ちわづらはせ給ふに。いとほしう」など、あつかひ聞ゆれば、「いさや。こ、らの人目も見ぐるしう、かのおぼさむことも、わかしくしう出で居んが、今さらに、つ、ましき」と、思すに、いと物憂けれど、情なう、もてなきんにも、たけからねば、とかう、うち嘆き、やすらひて、るざり出で給へる御けはひ、いと心にくし。

「こなたは、簧の子ばかりの許されは、侍りや」

とて、のぼり給へり。花やかにさし出でたる夕月夜に、(h)うちふるまひ給へるさま・匂ひ、似る物なく、めでたし。月頃のつもりを、つきくしう聞え給はんも、まばゆき程になりにければ、神を、いさ、か折りて、も給へりけるを、さしいれて、

「かはらぬ色をしるべにてこそ、」齋垣も越え「侍りにけれ。さも心憂く」

と聞え給へば、

神垣はしるしの杉もなき物をいかにまがへて折れる神ぞ

と、聞え給へば、

をとめ子があたりと思へば神葉の香をなつかしみとめてこそ折れ

大方のけはひ、わづらはしけれど、御簾ばかりは、ひき着て、長押におしか、りて、る給へり。心にまかせて、みたてまつりつべく、人もしたひざまに、おぼしたりつる年月は、のどかなりつる御心おごりに、さし

もおぼされざりき。また、心の中に、いかにぞや、きずありて、思ひ聞え給ひにし後、はた、あはれもさめつ、かく、御中も隔たりぬるを、珍しき御対面の、昔思えたるに、「あはれ」と、おぼし乱る、事、限りなし。来しかた行くさき、おぼし続けられて、心よわく泣き給ひぬ。女は、「さしも見えじ」と、思しつ、むめれど、え忍び給はぬ御気色を、いよく心ぐるしう、猶、おぼしとまるべきさまにぞ、きこえ給ふめる。月も入(り)ぬるにや、あはれなる空をながめつ、うらみ聞え給ふに、こら、思ひあつめ給へるつらさも、消えぬべし。やうく、「今は」と、思ひはなれ給へるに、「さればよ」と、中く心うこきて、おぼし乱る。(i)殿上の若君達など、うちつれて、とかく立ちわづらふなる庭のた、ずまひも、げに、艶なる方に、うけぱりたる有様なり。おもほし残すことなき御中らひに、聞えかはし給ふ事ども、まねびやらむ方なし。やうく、明け行(く)空の気色、ことさらに、作り出でたらむ様なり。

(j)あか月の別(れ)はいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな出で(が)てに、御手をとらへて、やすらひ給へる、いみじうなつかし。風、いと、ひや、かに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も、折知り顔なるを、(k)さして、思ふ事なきにだに、聞(き)過ぐしがたげなるに、まして、わりなき御心惑ひどもに、中く、こともゆかぬにや。

(l)おほかたの秋のあはれも悲しきに鳴く音なそへ野辺の松虫くやしき事多かれど、かひなければ、明け行(く)空も、はしたなうて、出で給ふ。道の程、いと露けし。女も、え心づよからず、名残、あはれにて、ながめ給ふ。(m)ほの見たてまつり給へる、月かげの御かたち、猶、とまれる匂ひなど、若き人々は、身にしめて、あやまちもしつべく、愛で聞ゆ。(二六七―三七二ページ)

右の引用で(a)から(m)まで記号を付した施線部分が、田辺聖子の私訳で削除

もしくは大きく書き直された部分である。彼女は私訳をおこなうとき、『源氏物語』を膨らましてはばかりでなく、原典の何かを捨てている。それはどのようなものか。

右の施線部分の中で、(a)、(c)、(h)の部分を見ると、源氏の六条御息所に対する心のわだかまりがみられる。御息所は「葵」巻で彼女の中の生霊で源氏の正妻葵上をとり殺しており、源氏はそれを知っているために御息所と逢うことをはばかっていた。しかしこれが最後の対面であるということと逢うこととするのである。そして野の宮の情趣あふれるたたずまいの中で逢うことの心情的抵抗を凍結して別れの場面を全うする。『新源氏物語』はそうした二人の心の複雑なありよう及び抒情の意味を慮ることなく、(a)、(c)を削除している。また、(h)の部分の「月頃のつもりを、つきくしう聞え給はんも、まばゆき程になりければ」に含まれる、既にとりかえしのつかない二人の仲を確認する意味合いを顧慮せず、後掲のように、「しかし二人の恋人は胸迫つてものがいえなかった」と、別れの悲しみを強調するに止まっている。更に(i)は草子地とよばれる語り手の物語へのあらわれの部分であるが、これを削り、物語が本来持つ表現の奥行きを失っている。

その他(e)、(f)、(m)では隨身、供の者、女房などの存在が記され、(b)では御息所の伊勢下向の理由が説明されているが、それらいわば主題(御息所との悲しい別れ)とは関りの薄い事柄を捨象してもいる。これらは前述のような小説としての主題的凝縮をはかるための操作といえる。あるいは、原典では(j)、(l)の歌にみられるように、自然が人の心情を象徴して、その描写による奥深い世界が現出するが、『新源氏物語』では自然をして心情を語らせるといふ微妙な表現も不可能になっている。

以上述べてきたことは、物語としての奥行きを浅くし、陰影ある描写の気分・情調に目を蓋い、深い人生的思索にも心を及ぼさないというように要約できるが、こうした事柄を犠牲にしながら田辺聖子が『新源氏物語』に籠めようとしたものは何か。上掲の原典中で施線部(b)の直前、「花やかにさし出でたる夕月夜に」以下の叙述に対応する『新源氏物語』「秋は逝き人は別る、賢木の宮の巻」中の文章を掲げて、田辺聖子が原文に増幅した部分を示してみよう。文中の□で囲まれた部分が原典に加えた田辺聖子の独自の表現部分である。

花やかな夕月夜となった。しかし二人の恋人は胸迫つてものがいえなかった。

青年は、折って手に持っていた榊の枝を、御簾の下へさし入れた。

「この榊の葉の色のように私の心は変わっていませんよ。だからこそ、こうして神聖な場所をもしばからず訪ねてきたのだ。それをあなたは、冷たくあしらわれる」

「榊は神さまの木ですわ。あだめいて、お手折りになるなんて……」

と御息所はつぶやいた。

「あなたのいられるあたりに、ゆかりのものはみな、なつかしいんですよ」

野の宮の雰囲気は、神事の場所だけに重々しく、源氏は気押しされつつも、御簾の中へ身を入れ、長押に寄りかかっていた。

久方ぶりの逢瀬は、青年の心を昔に引きもどしていた。

思えば——青年がいつも欲するとき、御息所に逢うことができ、御息所の方が、彼よりふかく愛していたときは、青年は彼女の愛に慢心して、かえりみなかった。そうして、彼女のすさまじい嫉妬や怨念の本性をかいまみてからは心冷えて、青年は離れていった。

しかしいま、こうして向きあってみると、昔の愛はまざまざと立ち戻っ

てくる。

この年上の恋人の、深い愛に気付かず、それに狎れ、心驕つた日のところが、くやしく思い返される。

「ほんとうに、伊勢へ下られるのか。私を捨てて行けると思われるのか」

この女に心ひかれた昔の日の恋は、まだ源氏には強い力をもっていた。

この女を失ってしまったあとの空虚をどうしよう。良くも悪しくも、この貴婦人は、源氏の青春を埋めた重要な恋人だった。

「思いとどまってほしい。私はあなたを失うのに堪えられぬ」

「わたくしは、あなたには、もう過去そのものですわ……何をしてさし

あげることできないのでございますもの」

御息所は堪えかねて顔を掩った。

「いいや、そんなことはない。もし私が、力づくでもあなたを伊勢へ遣

らぬ、といったら——」

「考えてもごらん下さいまし」

御息所は必死に涙をこらえ、微笑を浮かべようと努めていた。

「あなたとわたくしの仲が終つたいまは、もう、人に笑われるだけなの

ですわ、未練がましいそぶりは……恋の屋敷は空き家となり、人手に

渡ったのでございます。わたくしたちはごきげんよと言いついて、お

だやかにたのしく、お分かれするのですわ」

いううちに、彼女の言葉を裏切つて涙はひまなく流れおちた。それを

見る青年も胸がせきあげて思わず御息所のそばに迫り、抱きしめてささ

やいたのだ。

「もういちど、やり直したい、すべてを水に流して、一から手習いをは

じめよう、あなたも私も、ともにはじめからやり直すのだ、あの恋のは

じめの日をおぼえていられるか？……はじめて会った日のように私たち

は……」

「取り返しのことと、つかぬことがございます」

「いや、取り返しはつく」

青年の涙に御息所の涙がまじりあった。彼女は青年の頬を撫でて静かにいった。

「あなた……あなたには新しい運命が待っていますわ。運命に、待たれておいでになるかたですわ。……もうわたくしではお役にたてないのです」

「あなたは強い女だ」

「すべてを失うと、人は強くなりますわ。……さあ、月も落ちましたわ。

やがて夜があけます」

それでも青年は恋人の軀からだを離すことはできなかった。二度と恋人として逢う日がないとは信じられなかった。愛の日が終ったとは思いたくなかった。今は源氏の方が、御息所に執心して焦がれていた。

「あの昔の恋の日々を、まぼろしにしないでくれ」

青年は悲鳴のようにいった。この美女の中の美女、よき趣味人であり、当代きつての教養ある淑女、気位たかき貴婦人、愛執が凝って物の怪となるまで青年を恋してくれた女、その人を失うというのは、一つの世界が潰れるようにも、青年には思われた。

「さようならば、おっしゃらないで下さいまし」

御息所は低く哀願した。

「それから、お帰りのとき、こちらをお振り向きあそばさないで下さいまし。いつものように、明日か明後日とおっしゃって下さいまし……明日か明後日、また来る、と」

御息所はほそい指に力をこめ、青年の軀にすがっていた。

「さよならという言葉を、あなたからうかがうのが辛くて怖くて、わたくしはおびえておりました。こんなになつた今も、その言葉をおそれております……」

御息所の胸からこの年月、つもりつもった恋のうらみは消えていた。青年の真率な悲しみと懊悩をみると彼へのうらみつらみも溶けた。その代り、別れの決意もゆるぐよう、彼女は思いみだれ、よろめいた。

空は、いつか夜明けの色に変わりそめ、風が出ていた。虫の音も秋のやるせなさを添えるかのようにである。

「離したくない、あなたを手はなせない」

青年は御息所の手をとって、にぎりしめ、口づけする。

「私はおろかだった、あなたと別れるときに、どんなにあなたを愛しているかがわかった。もう、永久にあの楽しい日は去ったのか」

「いいえ、あの日は去つたのはございません。生きているかぎり、忘れはいたしませんもの。あの恋はまぼろしではございませんね」

青年は夜明けにうながされて去るとき、約束どおり、ふりむかず、「さよなら」ともいわなかった。しかし悲しみに茫然として涙ぐみ、秋の野をやみくもに踏みしだいて歩いていった。

御息所の方も、心まどいはなおさらだった。(彼を失った、彼を手放した、ついにそのときがきたのだ)源氏のわかい唇、熱っぽい細い軀、彼のやさしさ、彼のわがまま、彼の身勝手、彼の笑い、彼のあの男の動作、あれらを永久に失うのだ。なんと年上の女は、失う能力に(不幸にも)多く恵まれていることか。

部屋にまだのこる青年の衣の香り、月かげにみた姿が目のにこって、御息所はしばし、秋の未明の空へ物思わしげな視線をさまよわせていた。

(二一七―二二〇ページ、新潮社刊全五巻本の本文に拠る)

田辺聖子は『源氏紙風船』「埋める作業」で、「ほんのひとこと、あるいは一行二行の示唆暗示から、何ページもの場面を書き埋める、というのは、あくまで原典の意図に添い、その香気を失なわず、物語の流れをかき乱すことのないよう、そして面白さと品位を更に増幅するといっていてなければならぬ。」(一七二ページ)と述べているが、原典の(i)の直前の「きし方行くさき、おぼし続けられて、心よわく泣き給ひぬ。こころ、思ひ集め給へるつらさも、消えぬべし」という記述の意味を大きく膨らまして綴られた『新源氏物語』での源氏と御息所の姿は、そうした田辺聖子の私訳の姿勢の生かされたところとみることができる。ここでの二人の別れの姿は、大人の恋というよりは、けがれなき青年の恋というべきものである。原典では源氏自身、御息所との仲がこれ以上続けられないもの、別れが余儀ないものとして、御息所への未練のことはを使って、いわば儀礼的に慰留している感があるのに対して、『新源氏物語』では、そうした従来の経緯から自由になって、愛する者同士の、別れに臨んだ熱い思いを描いている。つまり源氏は「離したくない、あなたを手ばなせない」「私はおろかだった、あなたと別れるときに、どんなにあなたを愛しているかがわかった」といって、一途に御息所の伊勢行きをとどめようとしている。一方御息所も、原典の「物ごしばかりの対面は」と、人知れず、まら聞え給ひけり。(施線部(d)の後)という箇所では「はや、御息所の心も身も、恋人をまつ情念に濃く染まって、痺れていくようだった。」という内面を付与されて描かれ、恋に揺れ動く女の微妙な心の變をみせており、彼の対面では「わたくしは、あなたには、もう過去そのものですわ……何をしてさしあげることもできないのでございますもの。」「あなた……。あなたには新しい運命が待っていますわ。」といい、いわば源氏の将来を思い彼のために自ら身をひく、純な思い遣りの女として造型し直されている。二人の間には心のしこりはほとんどみられず、お互いを強く思いながら別れねばなら

ぬように書き直されているのである。

このように『源氏物語』の原典に潤いのあるやさしい心情を添え、田辺聖子はその世界を情熱あふれる青春の、清冽で麗しい姿として膨らませた。それが現代人の感覚にあわせた小説構成や会話文(歌を最小限にしてそれを会話文にかえて訳す)として描出されている。

以上述べてきたような原典の補いはほかに多くみられる。これらの補いによつて田辺聖子は、原典の「食い足りない、欲求不満」(『源氏紙風船』「埋める作業」一七二ページ)な箇所を、「美しき細片」をちりばめているのである。そのようにみえてくると、ここでの変改の姿は「年々歳々の『源氏』」の三十代の田辺聖子の『源氏物語』観に近く、四十代のそれでは決してない。いわば田辺聖子の三十代の『源氏物語』観であり、彼女はそれをもってこの『新源氏物語』の私訳をしたということになる。そして様々な恋の相を彼女の好尚にそつて増幅していたのである。

四

『源氏物語』はその描かれる世界の変化に従って、三部に分けてその世界を捉えるのが一般的であるが、源氏の「光明と青春」(池田亀鑑氏『新講源氏物語』昭二六・二七などによる指摘)を描く所謂第一部(「桐壺」巻から「藤裏葉」巻まで)が終つて、第二部の「若菜」巻後半以降、作中人物がその生涯のはてに憂愁と絶望を背負うことになり、田辺聖子が「悲しい小説」「失意と憂悶」「悲しい恋の紙吹雪」という内容がここに現出する。しかし彼女は従来の方法——持ち前の優しさの原典への充填——を全て放棄するのではなかった。

次の文章は『源氏物語』「幻」巻での源氏の述懐である。紫上を失い孤独の自己を顧みる、彼の憂愁の極限を表わしている。

この世につけては、飽かず思ふべきこと、をさくあるまじう、高き身には生まれながら、又、「人よりも、殊に口惜しき契りにもありけるかな」と思ふ事絶えず。世の、はかなく憂きを、知らすべく、仏などの、おきて給へる身なるべし。それを、しひて、知らず顔にながらふれば、かく、今はの夕べ近き末に、いみじき、ことの閉ぢめを見つるに、宿世のほども、みづからの心の際も、残りなく見果て、心安きに、いまさん、露のほだしなくなりたるを。これかれ、かくて、ありしよりけに、目馴らす人々の、「今は」とて、行き別れむ程こそ、いままきはの心、乱れぬべけれ。いと、はかなしかし。わろかりける、心の程かな。(一九八ページ)

田辺聖子は、この源氏の生涯を顧みる述懐を、『新源氏物語』の中から削除している。従来の私訳の路線に従うとき完全に源氏のベシズムに寄り添うことはできなかつたわけである。そして物語の最後を明るく開かれた形に改している。つまり、『新源氏物語』では次のような私訳をおこなっている。

に囲まれた部分が原典にその照応する箇所のない、彼女が新しく補ったものである。

やがて心ばそい、大晦日が来た。この日は鬼やらいの日である。三の宮が元氣よく、

「鬼やらいだ、鬼は外、福は内。もっと大きな音をたてないとだめだよ……」

と走り廻っていらつしやる。この愛らしいお姿を見ることが、もうできなくなるのだ。この世の愛欲や煩惱から離脱し、恩愛を断つて、あらたなる旅立ちへ向うのだ。世に傲り、人に愛執していた旧い自分は死に、莊嚴な浄土を欣求してひたすらいそむ新しい自分が生れるのだ。

へ物思ふと過ぐる月日も知らぬ間に 年もわが世も 今日や尽きぬ

る

紫の上との死別以来、月日は物思いのうちに過ぎていった。わが世も、今年も、今日でいよいよ尽きてしまうのだ。

年が明ければ忽々にも、源氏は世を捨て、出家する心組みであった。雪は降り積もる。

迷い多かりし源氏の生涯を、浄めるかのごとく雪は降り積もる。

暗い大空に舞う雪を眺める源氏の目は澄んで、おだやかに、光があつた。

右の文章中へ物思ふと……の歌のあとの記述が原典で「朔日のほどのと、常よりも殊なるべく」と、おきてさせ給ふ。親王たち・大臣の御引出物、しなぐの縁どもなど、「二なうおぼし設けて」とぞ。「幻」巻二一六ページとあることと比べて私訳で大きく変えられていることがわかる。原典では源氏はおもこの時に到って現世に執着を残して、来年の正月の準備などを考えている。この執着こそ、物語内に生動する現実が押しつめてきた源氏の生の結論であろう。物語は、生涯の長きにわたって現世離脱を志向する源氏を描きながら、彼の救済を叙述することができなかった。源氏は、救済のない絶望に佇んでいる。そうした物語世界の終幕に田辺聖子の加えたものは、⁽⁵⁾ 澄明な心をもって新しい世界に向かう源氏のおだやかな姿であった。このように田辺聖子は、物語変改の方法を使って、物語世界に希望を添えているのである。それは無論彼女のこの時期の『源氏物語』観そのものとはいえない。彼女は『千すじの黒髪——わが愛の与謝野晶子』の中で、

恋の子・光源氏が愛してはならぬ人を愛したばかりに、踏みまよふ不倫の恋の暗い、美しいもだえ。かなしい恋の花吹雪。

かりそめにも義母にあたる美しい藤壺に、わが子を産ませてしまった、悲痛な悔恨。ゆるしがたい罪に身をせめて、世を捨てた藤壺と、苦惱す

源氏の君の心の葛藤のうちに、ぼつと灯のともったようにあかるく、愛らしい、少女・紫の上の出現。

さらに可憐な夕顔の劇的な死と、年上の恋人・六条御息所の狂乱。さまざまに入りみだれ、つないではほどかれる人間と、人間関係の息もつかせぬ面白さ。正妻・葵の上はうちとけがなく、六条夫人は二人とないう才色すぐれた人ながら魔性の重苦しさに堪えられず、どんな女も至上という女はありえず、女の性の種々相が目もあやにくりひろげられてゆく。この人こそ、と少女のころから、わが手で気のすままにそだてあげた、女の理想ともいえる紫の上は、子の出来ない女だった。なんという心にくい、作者の人間への洞察と共感。

そして最後に、源氏はまたもや、おのが犯した過失の罪をそのまま、自分の妻の三の宮と青年・柏木の密通によって、むくいをうけることになる。厳肅な運命の手によって。

輪廻といおうか、因果応報といおうか、かくして、華やかにはじまつた絵巻物は、くらい力づよい、おそろしい余韻をひびかせつつ、終るのである。

愛を奪ったものは、必ず奪い返される。おこそかな、何ものとも知れぬ大きな宇宙の意志のごとき力によって。(『全集』一九一—二〇ページ)

と述べているが、これこそが、この作品を執筆する四十代の彼女の『源氏物語』のみかたであり、「年々歳々の『源氏』」の中でこの物語を「悲しい小説」とした内容と重なるものであろう。そのような内実を『新源氏物語』執筆以前に見据えながら、彼女は原典の末尾を改変し、救いのない「悲しい小説」から脱しているものと考えたい。彼女は三十代の「愛の見本帳」の延長にある、明るいロマンチズムを一貫して堅持してこの世界を作り上げているのである。

そうした田辺聖子三十代の『源氏物語』観から四十代のそれへの変貌を見るのに示唆的なのは、『準別王子の反乱』(昭五二・一、中央公論社刊)である。この小説は二部に分かれており、第一部は、準別と女鳥姫の死をもかえりみぬ純愛が若々しい情感の中に描かれるが、第二部に入ると、この二人を滅ぼした張本人の磐野媛の老いた後の孤独と暗い運命を描いて、その調子を变えている。第一部は少女時代から抱いてきたロマンのモチーフのまとまったものであり、第二部は『源氏物語』などに触発されて書かれた、人の生き悲しみの姿である。両者の埋めがたいギャップは、田辺聖子三十代の『源氏物語』観と四十代のそのギャップであるといえる。彼女にとって『源氏物語』は、窮屈な悲哀を最後に控えたものであった。

『新源氏物語』は、源氏の後世の救済を予兆する形でその幕が閉じられている。田辺聖子は『源氏物語』続編(第三部)、つまり宇治十帖を中心とする巻々の訳を保留している。その巻々は、例えばそこに青年の純愛の要素を補って善意の人々の集りにしてみたところで、宇治大君の生や浮舟の運命を含め、根本的にやりきれない矛盾を抱える悲劇の人生を描いたものであり、「賢木」巻・「幻」巻で補ったような操作はきかないのである。田辺聖子が『源氏物語』続編に追隨して彼女三十代の『源氏物語』観をもって恋愛讃歌・人生讃歌を描こうとしても、その操作された世界と、原典の世界がもつ固有の論理の間に不整合を惹起することになる。それは、三十代の心で『源氏物語』とつきあうことの限界を意味する。『新源氏物語』で、彼女は青年の「愛の見本帳」の意味を増幅する姿勢をもって『源氏物語』を再生させながら、あくまでこの物語を「悲しい小説」と捉え、その救いのない状態につきあってきた。しかしそのような『源氏物語』観が彼女の本領ではない。

田辺聖子の場合、その小説は、深刻な題材を作中人物のもつユーモア・若さの持つ純粹さ・繊細な優しさで深刻化させず、ある種の救いを感じさせて

終わる。宇治十帖はそうした彼女の創作の姿勢とは懸け離れた深刻さをもって展開する。宇治十帖の私訳には、新たな姿勢が必要であると思われる。五十代以降の彼女の『源氏物語』観が問われる所以である。

五

田辺聖子は五十代に入って更に『源氏物語』観を膨らましていく。「年々歳々の『源氏』の「しかし、このころ、五十代に足をふみ入れるようになって」以下の文章で、『源氏物語』について「悲しい小説であるが、それは昇華されて、生きる喜びにたかめられている。人間のおろかさ、至らなさが、そのまま、人間というもののよきになっている。」と述べている。物語の中のやりきれない悲哀が決して悲哀そのままで終わっているのではなく、そこには悲哀を包むあたたかい情動がある。物語の人々はこの上ない悲劇を生きる。しかしそこに生きる人間というものはあくまで信じられる。長い人生を旅してよりふくらんだ人間へのオプティミズムをここに見ることができる。

またこの五十代に田辺聖子は「自然の美しさ」を『源氏物語』に発見している。それは「二条の邸と三条の邸」（『文学』昭五八・三）などにみられるところである。この時期多くの旅行記を書き自然と対話しており、そうした自然の凝縮したものを『源氏物語』に見出しているようである。

四十代において『源氏物語』と「悲しい小説」としてつきあった田辺聖子は、五十代に入って『源氏物語』をパロディ化した『私本源氏物語』を昭和五十五年に刊行する。この小説は、『源氏物語』が源氏をめぐる巷間の噂をまとめたものであるのに対して源氏の真実の姿を描いたものという設定⁷⁾になっており、その真実の姿とは、美貌と若さと富と権力に恵まれながら卑小な人間性（例えば、我が儘・自惚れ・大食いなど）を隠し持ち、その若さ（人生経験の浅さ）のため多くの女性との交渉も充たされぬ戯画化された結末に終

るというものである。そうした源氏のありようは、『源氏紙風船』における田辺聖子の源氏観、例えば「まめやかな性格、ということになっているが、一面、わがままで強引」、「かなり「心おこり」のある男」、「道ならぬ恋」にはかり情熱を持つ」、「生涯、悟ることはなく、恋の諸訳を知ることなく、無明の煩惱地獄をさまよう」、「一大野暮の骨頂」（以上「源氏という男」の章）などといったものを滑稽の方向へ掘り下げたものと解せよう。源氏の姿は彼に従う四十過ぎの下部、ヒゲの伴男の視点から、「おとなの男女の情趣」を山盛り⁸⁾に盛りあげてその情趣の香りにむせ返って、おのれたち自身も酔ったようになつて、やつと恋をたしかめている」、「現在ただいまを、一ばんよくしようとして貪欲に快楽をむさばり、勇敢に恋を漁る。そうして充実しようとする。若い人は蓄積がないから不安なのだろう」（以上「何とも夕顔泣き恋の始末の巻」と捉えられ、加えて伴男の演ずる中年の人生を楽しむ余裕の様と対照されており、これらの記述は『新源氏物語』の中の源氏の恋を相対化するものといえるものであつて、『新源氏物語』に補えなかつた田辺聖子の『源氏物語』への思いを描いたものといえる。

更に昭和五十八年、『新私本源氏 春のめざめは紫の巻』を刊行する。ここでは語り手は各章段それぞれに異なり、前書と同様源氏は笑殺され、伴男の人生観はそのまま生かされているものの、その立場さえも相対化され、各章の語り手をヒロインの側に置いて彼女達の立場に入り込み、「人間、生きてる限り、現役やないか、と。世の中、面白い遊びや、思うて生きてるかぎり現役や、思いますねん。」（「六条ろくでなしの巻」という伴男のことは象徴されるように、一人一人立場の違う生き方への深い共感を内に取り込んでいく。単なる愛する男女の戯画化ではなく、『源氏物語』の筋立てなどを自在に利用して、生きがたい深刻な生の状況をユーモアをもって転回し、生きる喜びを充填しつつその現実への暖かい眼差しを作り出している。それは田辺聖

子の中短編小説の書きぶりに近く、『源氏物語』を材としてあらたな小説を作り上げる方法を垣間みせるものでもあるといえるが、そうした方法を保証するものが『源氏物語』の底に流れる人間存在への信頼の姿であることは看過できない。

『新源氏物語』は三十代の田辺聖子の『源氏物語』観が生かされ、更に四十代の『源氏物語』観の影響下に成立している。そうした『新源氏物語』における姿勢から自由になること、『源氏』離れが『新私本源氏 春のめざめは紫の巻』でおこなわれ、彼女本来の小説作法に則つてその創作がおこなわれているものと考えたい。「年々歳々の『源氏』にある「これから先の私は、更にどんな風に『源氏』を読もうとするのだろうか。」という問いかけに対する一つの答えをこの延長にみる事ができよう。⁽⁹⁾

田辺聖子は、猶も不定形の愛を現実の世相に合わせて書く営為の中で深刻な生の状況をそのままデリカシーや誠実さをもって受け止め、ユーモアと暖かい情動で包みつつその小説世界を展開しているが、そのような営みの中で、人間存在への根源的信頼の姿勢を湛えた宇治十帖の巻々の私訳の準備がおこなわれているものと考えたい。⁽¹⁰⁾

(1) 田辺聖子の『源氏物語』とのつきあいを跡づける彼女の創作のおもなものと次のような作品をあげることができる。

- ・ 文車日記―私の古典散歩 (昭四九・一一、新潮社)
- ・ 新源氏物語 一―五 (昭五三・一一―五四・四、新潮社)
- ・ 私本・源氏物語 (昭五五・一、実業之日本社)
- ・ 源氏紙風船 (昭五六・一〇、新潮社)
- ・ 新私本源氏 春のめざめは紫の巻 (昭五八・五、実業之日本社)

・ 絵草子源氏物語 (昭五四・一〇、角川書店)

(2) この間、昭和四十七年九月より翌年六月にかけて内地文子氏訳『源氏物語』全十巻が新潮社から刊行されている。

(3) 『源氏物語』本文の引用は山岸徳平氏校注『源氏物語』(日本古典文学大系、岩波書店)に拠る。

(4) 例えば『源氏紙風船』の中で彼女はその補いの部分として、朝顔宮の出現(『帯木』巻)、藤壺と源氏の逢瀬(『若紫』巻)、車争いの際の朝顔の動揺(『葵』巻)、紫上との新枕(『葵』巻)、明石上と源氏の出会い(『明石』巻)、夕霧と雲井雁の幼い恋(『少女』巻)、柏木の女三宮への侵入(『若菜』下巻)などの箇所を掲げている。

(5) 『絵草子源氏物語』(昭五四・一〇刊)では『新源氏物語』のこの箇所を増補を『雲隠』巻に綴って、源氏の救済を確保している。

(6) この小説は『週刊小説』昭和五十二年十一月十八日号から昭和五十四年八月三日号まで八章に分けて発表され、昭和五十五年一月、『私本・源氏物語』として、実業之日本社より刊行された。

(7) こうした設定は、『新私本源氏 春のめざめは紫の巻』の「六条ろくでなしの巻」や『異本源氏物語 恋のからたち垣の巻』「恋の式部の巻」で、各々齋宮や式部の物語創作の記述の中にもみることが出来る。

(8) 初出は『週刊小説』昭和五十五年一月二十五日号から昭和五十八年一月十四日号まで。

(9) この後、田辺聖子は昭和六十二年四月に『異本源氏物語 恋のからたち垣の巻』(初出は『週刊小説』昭和五八・七・一五―六一・一〇)を書いていく。これは時代背景や源氏・伴男などの人物設定を『私本・源氏物語』から踏襲しているものの、『源氏物語』の筋立てから離れて

おり、そうした自由な設定において田辺聖子は、恋に奔走し蹉跌する源氏の姿を、彼とは異なる女性観をもった伴男を語り手として滑稽さの中に描いている。

(10) なお、「一人称の語り」による「文脈の多層性、発想の多次元性」等田辺聖子の小説作法と『源氏物語』との関連性については清水好子氏が『全集』第八巻解説「文章家田辺聖子氏」の中で指摘されている。